

川口市の水環境

安行原のような台地上では、河川や用水の恩恵を受けられないため、農業を行うためには雨に頼らざるを得ませんでした。

台地が生み出す谷あいの地形を「谷津」や「谷戸」などと呼びますが、こうした場所では、台地の地中を走っていた地下水が湧き水として湧き出てくるため、この水を利用することができました。弁才天もこうした湧き水の近くで祀られる例が多く見られます。

一方低地では、かつては氾濫を繰り返す河川と、水はけの悪い低湿地に悩まされてきましたが、江戸時代以降の干拓や用水の整備などで克服していくことになります。

また、本市での特徴的な水環境として「吹き井戸」があります。これは汲み上げなくとも自噴する井戸のことで、『江戸名所図会』にも「鍋屋の井」として描かれています。

川口市内だけでも場所によってどのように水の恩恵を受け、また悩まされてきたかという点で大きな違いがあります。雨が頼りの台地では、人々は雨を祈ったことでしょう。湧き水や吹き井戸が得られる場所では、そのことに感謝したでしょう。市内での蛇や水に関する様々な行事や石碑、伝説や民話などは、こうした本市の水環境と、人々がそれに対してどのように対処したかという歴史を浮かび上がらせてくれています。



※『川口市文化財調査報告書 第三集』(昭和50年 川口市教育委員会)を元に作成